



## 小笠原諸島<sup>むこじま</sup>聳島のアホウドリ、初めて1シーズンで3羽が誕生

山階鳥類研究所では、小笠原諸島聳島にアホウドリの新繁殖地を形成するため、保全活動やモニタリング（継続監視）を行っています。

今シーズンの繁殖期（2023-24）は、聳島でこれまでで最多となる3羽のひなの誕生が確認されました。

ひなや繁殖するペアが増えると若鳥が誘引されるため、聳島での自然繁殖はさらに増加することが期待でき、新繁殖地の形成に向かって一步前進したと言えます。

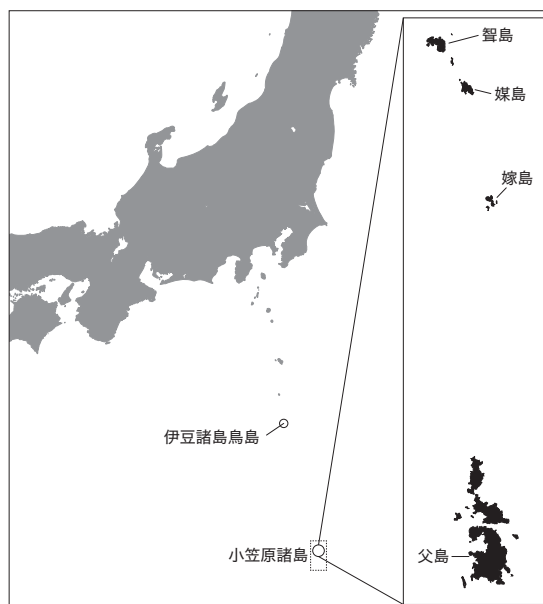
山階鳥類研究所では、伊豆諸島鳥島（以下、鳥島）と小笠原諸島聳島（以下、聳島）で、アホウドリの繁殖状況についてモニタリングを実施しています\*1。アホウドリは、翼開長（翼を広げた長さ）がゆうに2mを超える、とても大きい海鳥です。繁殖期は10月から翌年5月までで、1ペアで1羽のひなを育てます。ひなは巣立ちから3～5年ほど経つと、巣立った場所に戻ってきて繁殖に参加するようになります。しかしすぐ繁殖に成功するわけではなく、ひなを巣立たせるようになるまでさらに数年がかかることがあります。

アホウドリは、かつて羽毛採集のために大量捕獲されたことが原因で、絶滅したとまで言われましたが、鳥島で再発見され、その後の関係者の手厚い保全活動により現在約8,600羽にまで回復しています\*2。しかし、鳥島は火山島で繁殖地としては不安定なことから、かつての繁殖地であった聳島に鳥島からひなを移送して人工飼育し、これらの個体をもとに新繁殖地を形成させる事業が2008年から2012年にかけて実施されました。現在は、鳥島と聳島でアホウドリのモニタリングを毎年、年に数回行っています。

2008年に移送され巣立った個体が聳島に戻ってくるようになったのは2011年でした。この個体は2012年には野生個体とペアになり、2015年まで毎年産卵がみられましたが、孵化しませんでした。ところが、繁殖開始から4年目、移送開始から8年目の2016年になって、このペアから初めてひなが誕生しました。これは初めての聳島生まれのひなです。



今シーズン生まれのひな（3月）



鳥島、聳島の位置



公益財団法人 山階鳥類研究所

その後、このペアは5年連続でひなを巣立たせることに成功しました。

2022年、2023年には繁殖に成功したペアは2組となり、2年で計4羽が巣立ちました。そして、2024年はついに3ペア目も卵を孵化させ、初めて1シーズンに3羽のひなが確認されました。ひなにはすべて個体識別のための番号がついた足環がつけられます。



1月に観察されたアホウドリの成鳥5羽とひな2羽

1シーズンに誕生するひなの数が増えるということは、個体数の増加を意味するだけでなく、鴛島周辺に飛来する別の個体にそこが繁殖適地であることをアピールし、ここで営巣するペアの増加につながります。鳥島での観察から、10ペア以上が安定して繁殖するようになれば、繁殖地として自立できると考えられます。現在の状況から、鴛島が安定した新繁殖地になるという目標の達成に向かって着実に進んでいると言えるでしょう。

※1：鳥島は環境省からの委託、鴛島は東京都小笠原支庁からの委託。

※2：鳥島では今シーズンに1,173羽が巣立ったと考えられ、順調に個体数が増加している。

注) 鴛島での新繁殖地形成事業は、(公財)山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て、アホウドリの保全のため、鴛島に新しい繁殖地を形成する目的で、鳥島のひなの移送(2008～2012年)と音声とデコイによる誘引(2007～2022年)をし、モニタリングを実施している。

**この件についてのお問い合わせ先：**

公益財団法人 山階鳥類研究所

千葉県我孫子市高野山115

電話：04-7182-1101

担当：広報 山岡容子 (Eメール：[pressrelease@yamashina.or.jp](mailto:pressrelease@yamashina.or.jp))

- ・写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。
- ・アホウドリ保全事業の解説と今シーズンの報告についての資料をご用意していますので、ご請求ください。